

Dioctophyme renale. Am J Surg Pathol 1987, 11: 598-605

- 3) Sobel, H. J., Schiffman, R. J., Schwarz, R., Albert, W. S.: Granulomas and peritonitis due to starch glove powder. Arch Pathol 1971, 91: 559-568

- 4) Rosai, J.: The nature of myospherulosis of the upper respiratory tract. Am J Clin Pathol 1978, 69: 475-481

- 5) 上田恵一, 外松茂太郎: 毛嚢性角化症 6, Darier 病. 現代皮膚科学体系 14 A (紅皮症, 角化異常性疾患 I), 中山書店, 東京, 1981, 122-134

コラム

猩々

オランウータン orang utan は、東南アジア、とくにスマトラ島とボルネオ島の熱帯林に住む霊長類で、木の上に皿状の巣をつくって暮らし、群れをつくらない。マレー語で「森の人」を意味するオランウータンは、尾がないこと、手をうまく使うこと、歯の数が32本であること、泳ぎができないこと、雑食性であることなど、人間と共通の性質を有する類人猿である。オランウータンは、漢字では「猩々(しょうじょう)」と記される。

「猩々」は、本来、からだか猿、顔が人に似ている中国の想像上の動物を指した。長髪赤ら顔で、言葉ができて、無類の酒好きなのだそう。ここから、さらに転じて赤ら顔の大酒飲みを指すようにもなった。「猩々緋」あるいは「猩紅」とは黒味を帯びた鮮やかな深紅色を指す。「猩血」は真っ赤な色のたとえに使われる。「猩紅熱 scarlet fever」は、言わずと知れた、全身が紅潮する小児期の法定伝染病である。日本伝統のお能でも「猩々」と題される赤ら顔の老人が主役の「鬼畜物」がある。

この由緒ある名前をいただいた酒好きの昆虫がいる。米国の生物学者でノーベル賞を受賞したモルガン博士(Thomas. H. Morgan 1866~1945)が牛乳びんで飼育して遺伝学の実験に利用して以来、遺伝研究になくはならぬ材料となった「ショウジョウバエ(猩々蠅) *Drosophila*」である。このショウジョウバエという成長の早い小型のハエは、世界に約2,500種、日本だけでも240種を数えるそう。

ショウジョウバエはアルコール臭が大好きで、日本酒、焼酎、ワイン、ビール、なんでもござれ。杯やグラスの縁にとまって、文字通り酒に溺れることのあるイキなハエ君なのだ。もっとも一般的なキイロショウジョウバエ *D. megalogaster* は、体長2~3mmで、複眼の色はご丁寧にも「赤色」なのである。ビール工場の周辺でときに発生するハエ騒動は、複眼の茶色いクロショウジョウバエ *D. virilis* による。ビールの芳香に誘われたクロショウジョウバエがビールびんの内壁に産卵し、ウジがビールの残液の中に大量発生するのだそう。ショウジョウバエとエチルアルコールのつきあいは、太古の原生林でアルコール発酵を生じた樹液や果実を舐めにきたのがルーツと考えられる。かれらは、腐った植物や果物、酢、それにミソも大好きなのである。昆虫学者の観察によると、ショウジョウバエの酒好きの傾向は、オスにより顕著らしい。

キクイムシ、ケシキスイ、ヒラタムシといった甲虫も酒好きの仲間である。自然の中でビールやワインをたしなんでいると、毒性の強いことで悪名の高いスズメバチが集まってくるそう。スズメバチはショウジョウバエ顔負けの酒飲みである。酔っ払って、酔っ払ったハチにいたずらをしていないように、くれぐれもご注意を。ちなみに、クロスズメバチの幼虫やさなぎは、信州では、「ハチの子」として酒の肴にされる。昔の人の知恵はさすがと言わざるをえない。

(医学のあゆみ 1996, 179: 412 より転載)